

## トニー・シュヴァルツの音響ドキュメンタリーにおける「共鳴原理」

金子智太郎（東京芸術大学）

環境音の録音を作品として提示する、または作品の素材に利用する「フィールド・レコーディング」と呼ばれる方法は、現在も音を使う実践のなかで重要性を増している。こうした方法はこれまで主に二つの文脈から理解されてきた。環境音の録音を音楽の素材にするミュージック・コンクレートと、音響環境をそのなかで暮らす人間との関わりを通じて観察するサウンドスケープ・レコーディングである。しかし、ウィル・モンゴメリーらが紹介する近年のフィールド・レコーディング実践はこれらの方向とは異なり、録音再生という行為自体を強調しているように見える。

アメリカの録音技術者、テレビコマーシャル作家、メディア理論家のトニー・シュヴァルツ (Tony Schwartz, 1923-2008) は 50、60 年代に、彼が住んでいたニューヨークの音楽、声、環境音などを収録した、音響ドキュメンタリーのレコードを発表している。彼の作品はフィールド・レコーディング実践の先駆のひとつと見なせるだろう。ただし、先の二つの文脈とは異なる理解に開かれていると考えられる。シュヴァルツはラジオと共に成長し、40 年代半ばに当時普及し始めた磁気録音装置を入手する。地方のストリート・ミュージシャンがマンハッタンに集まり始めた時代に、彼は自分の周囲で日々鳴り続ける音楽、声、環境音を収集して膨大なアーカイブを作り上げた。そして、その一部を民族音楽や環境音のレコードを専門とするレーベル、フォークウェイズから次々と発表した。彼の作品はマンハッタンの人々の日常生活と、そこにマイクを持ちこむシュヴァルツの録音実践の姿を浮かび上がらせる。

本発表ではシュヴァルツの音響ドキュメンタリーをライナー、インタビュー等を参照して分析し、彼の録音再生行為の特徴を浮き彫りにしたい。発売元のフォークウェイズの姿勢や、後のコマーシャル制作も考慮に入れる。とりわけ注目するのは彼が 70 年代以降に執筆した、マーシャル・マクルーハンのメディア理論を「聴覚的空間」の概念を中心に敷衍する、二冊のメディア・コミュニケーション理論書である。コマーシャル制作は音響ドキュメンタリー制作哲学の応用だと語る彼の著作は、音響ドキュメンタリーを理解するための指針にもなるはずだ。特に『レスポンス・コード』(1973) で論じられた、電子メディアによるコミュニケーションの「共鳴原理」に焦点を合わせる。この原理は、この種のコミュニケーションでは情報を送るより、受け手が元々持っている情報を思い出させる方が重要だというものである。本発表ではこの原理やこれにもとづく理論の詳細が、彼自身の録音再生実践を通じて培われたものであり、そのことが音響ドキュメンタリーにも見てとれることを解説する。そうすることで、録音再生行為を強調する近年のフィールド・レコーディング実践の考察にも貢献したい。